

海藻と海草

増殖部 辻 寧 昭

“かいそう”と云う場合、海藻と海草のどちらが正しいのですか。とか、海藻と海草はどう違うのですか。とよく聞かれます。

日本語は発音が同じだったり、仮名で書くと同じでも、漢字で書くとは違っていて、しかも意味や内容が異なるものが沢山ありますので、戸惑ったり、とんだ間違いをすることがなともあって、困ることがあります。海藻と海草もその一つです。

広辞苑によりますと、海藻とは海中に生育する緑藻、褐藻、紅藻などの総称。とあり、海草とは海中に生ずる顕花植物でアマモの類。となつています。余談ですが、“かいそう”を漢字にすると他に海葱、改装、改葬、会葬階層、界層、回送、回漕、回想、快走、潰走などがあります。

生物学的に少し突込んでみますと、海藻は海に生活する藻類の総称ですので、非常に多くの種類とグループが含まれます。即ち、植物性プランクトンと云われる珪藻類や渦鞭藻類なども含まれます。しかし、普通海藻という場合は、底生する緑藻類、褐藻類、紅藻類

の3グループを云い、時には藍藻類も含むことがあります。

これらについて一つ一つ説明しますと膨大になりますので、ここでは一括して顕花植物との主な違いについてお話しすることにします。

顕花植物では何んといっても花があることですが、その他にも種子を作ること、根、茎、葉と器官が分化して分業化が進んでいること、体の中に維管束といって栄養分や水を運搬する通路があること、などが上げられます。

海藻では花はなく、種子もない。根、茎、葉の分化がなく、維管束がないので体の表面全体で栄養分や水の吸収を行っています。通常根と云っているのは、正しくは仮根といって単なる付着組織に過ぎません。

次に海藻について緑藻類、褐藻類、紅藻類の目立つ違いについて述べてみます。

緑藻類は葉緑素以外の色素を持ちませんが、色の濃さの違いはありますが緑色をしています。

褐藻類は葉緑素の外に褐色素を持っていますので、その量などによって黒褐色から褐色ないし灰白色を呈します。ただし褐藻素は分解され易いので、海岸などに打ち上げられている褐藻類で緑色をしているものもあります。ワカメやマツモなどを熱湯に入れると緑色になるのは、褐藻素が分解されて葉緑素だけが残るためです。

紅藻類は葉緑素の外に紅藻素を持っていますので、その量などによって暗赤紫色から赤色ないしは淡紅色を呈します。紅藻素も分解され易いので紅藻類も褐藻類と同様、緑色になることがあります。ツノマタやアマノリなどを味噌汁に入れると緑色に変化するののはこのためです。また、紅藻類の中には浅くて日当りの良い場所に生育しているものは、ツノマタ類のように緑色をしていたり、アカバのように黄色になっているものもありますので間違えないように注意しましょう。

海草は先に述べた顕花植物の一種です。だから海中に生育していても立派に花を咲かせます。この花を見ると丁度イネの花を逆向きにしたような感じで、水中にある特性とマッチして造型主の妙を感じさせられます。これで海藻と海草に大変な違いがあることをおわかりいただけるかと存じます。

それでは海草についてもう少し調べてみますと、分類学的にはアマモ科に属します。ア

アマモ科の主な特長は海産の多年草で、明らかに根茎があり、葉は2列に並び細長くて扁平、基部は鞘をなす。とあります。花は雌雄異花で、仏饅苞に包われた肉穂花序の一侧に着き花被は0、時に透明質の苞がある。となっています。

アマモ科はアマモ属とスガモ属の2つに分けられますが、アマモ属は雌雄同株で根茎は細く、長い匍枝を生じ、茎は伸長するのに対して、スガモ属は雌雄異株で根茎は太くて短く、葉生する。茎は短く伸長しないことなどで区別されています。

次に道東に分布する海草の仲間は数が少ないので、それらについて若干述べておきますので、区別の参考になればと思います。

スガモ：外海性で内湾的な淡水の影響を強く受ける所は好みません。外海の岩礁地帯に生育して、生育水深は3mまでで、葉長は通常20〜100cmですが、繁茂の盛期には2m以上に達します。葉巾は2〜4.5cm、葉端は円頭で、葉脈は3、上縁に微歯があるので触るとザラザラした感じですが、また纖維質が強いので容易に切れません。花期は7〜9月です。産地は本州北部から北海道で千島、樺太にも分布します。ゴモ、ゴモクサ、アオゴモ、ハイスガモ、スゲ、ウミスゲ、ハマクサ、クロモ、ノザ、エビモ、デンセンモなどとも呼ばれています。

アマモ：内湾性の砂泥質の所に好んで生育しますが、外海にも見られます。生育水深は3mまでで、葉長は2mに達し、葉巾は3〜10cm、葉端は円頭で、葉脈は5〜7です。質は軟らかですが、スガモ程ではないにしても簡単に切れません。花期は6〜8月です。

本邦全域に普通に産し、アジア、ヨーロッパ、北アメリカにも生育する分布の広い種類です。アマモは甘藻の意味で根茎に甘味があります。別名としてリュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ（龍宮の乙姫の元結の切外し）という長い呼名がある他、モシオグサ、アジモ、スゲモ、ハマユウなどとも呼ばれています。

オオアマモ：アマモと似ていますが大型になる他、次の点で異なります。即ち、アマモよりは外洋性で葉長は2m以上に達します。葉巾は10〜20cm、葉端は稍円頭で、葉脈は9〜11です。花期は7〜10月で産地は北海道。分分は千島、樺太、朝鮮となっています。

コアマモ：アマモと良く似ていますが、アマモより内湾性で外海には見られません。泥質を好み、生育水深は浅く1m以下です。葉長は10〜40cmで葉巾は1.5〜2cm、葉脈は3で葉端は円頭ないし微凹頭になっています。花期は9〜11月です。産地は本邦全域で、アジア、ヨーロッパ、アフリカにも産し、分布の広い種類です。コモ、ニラモ、ヒメアマモなどの別名もあります。

この外、北海道にはスゲアマモが産することになっていますが、私は見たことがありませんので省略します。

最後に余談になりますが、測路水試で担当している事業に、藻場保護水面管理事業というのがありますが、これはホッカイエビの増殖を図るため、アマモの生育場を保護造成しようとするのですから、先の理由から草場保護水面管理事業が正しいようです。また、同様にアマモなどを対称とした藻場造成は、草場造成といった方が良いでしょう。